

概要

平成23年度第2回伊賀地域高等学校再編活性化推進協議会

平成23年10月27日(木) 18:30~20:35 三重県伊賀庁舎

- 1 あいさつ(石田会長)
- 2 報告事項 第1回協議会の概要
- 3 協議

(1) 伊賀地域におけるこれまでの高等学校再編活性化の検証について

会長 伊賀地域の再編活性化について、適正規模や適正配置等の観点から意見をいただきたい。

中谷委員 名張市の3校が「横並び」という意見があるが、これまで各校に特色を持たせ、「伊賀地域の子どもたちは伊賀の学校で」という考えで進めてきたし、今後も進めたい。地域の声としては学校を減らさず選択肢を残したいという意見がある。

会長 平成21年度に上野高校で理数科を設置した効果はどうか。

渡辺委員 まだ進学の数値は出ていないが、入学者数から見ると津方面に流れていた名張市の生徒も理数科に目を向けており、成績面でも対抗できていると考えている。

中谷委員 名張からは交通費では津方面のほうが安いという現状があり、名張地域にも上野高校理数科のようなクラスが必要ではないかと考えている。

田山委員 伊賀白鳳高校へは生徒が第1希望で行っているのか。保護者や生徒のニーズが進学であれば、職業教育の部分は残すとしても、進学の分野で幅を広げていくことも時代の流れとしてはあるのではないかと。

事務局 伊賀白鳳高校の後期選抜の状況を見ていると前期選抜で不合格になった生徒の再受験率は高く、専門学科に行きたかった生徒が受検しているといえる。

山口副教育長 今の時代には専門高校からも大学に行ける。ただ、大学を卒業してもフリーターや無業者になるケースもあり、キャリア教育をもう少し早い段階からやるべきではないか、職業観や勤労観をもっと教えていくべきではないかということになっている。

田山委員 進学希望の生徒が多いのならば、伊賀の高校の普通科を充実するということが短期的には必要である。それが特色化の部分につながっていけばよいが。

渡辺委員 伊賀地区6校を合わせた平成22年度の進路状況は、四年制大学45%、短期大学7%、専門学校19%、就職22%になっており、7%が浪人生である。

会長 もう一つの問題は、伊賀白鳳高校に入学して満足している生徒が7割、満足していない生徒が3割であり、自分の望んだ学科に入れていないという現実もある。

事務局 伊賀白鳳高校では全体として約90%の生徒が第1希望の学科・コースに入っている。各学科・コースの内容を体験する「産業技術基礎」の科目の中で、学ぶ過程を重視しながら、面談等の丁寧な対応を行い、納得して所属学科を決定すると聞いている。

会長 大学における経験からいうと、10%の者が希望する学科に入れなくなると、学科として成立しないくらいの教育となるので、もっと真剣に考え直さなければいけないと思う。また、普通科と専門学科の比率が適切かどうかという問題もある。

三木委員 伊賀市の保護者からは、伊賀白鳳高校に普通科があったらいいなという意見がある。上野高校に行けないので名張市内の高校に進学すると、伊賀市の郡部からはかなりの時間と交通費が必要である。

山森委員 名張からは上野に行くよりも津に行く方が安い。子どもたちの中には保護者の負担のことも考えてやむなく近くの学校に行っている生徒もいる。

味岡委員 伊賀の交通体系は変えられないという前提で学校の配置も考えなければなら

ない。

林委員 適正規模は3学級から8学級と非常に幅の広いとらえ方をしているが、根拠を教えてくださいと、議論が焦点化されるのではないかと思います。

事務局 学校の施設設備や運営について議論され、適切な学校規模として考えられた。全国的には4学級からとしている県が多いが、三重県の場合は南北に長いということで地域による差が大きく、幅を持たせて3学級以上としている。

林委員 子どもたちの選択肢のために高校を残してほしいが、高校が学級減によって運営や活性化に支障をきたすのであれば、どちらが大事かということで聞かせていただいた。

会長 3学級から8学級は全県の適正規模である。しかし、学校の運営上、この地域において適正な規模があるという考え方はご理解いただけるのではないかと思います。

山森委員 名張桔梗丘高校と名張西高校の2校が減を引き受けるような方向性に感じられたが、子どもが減るので、普通科に限らず全体的に縮小するという考え方でよいか。

会長 基本的にはそうである。

味岡委員 伊賀白鳳高校については、アンケートを見ると問題点はあると感じているが、一定規模の学校になり、非常に活性化されたという実感がある。希望通りのコースに行くことができない生徒がいるということは致し方ないと思う。

上島委員 あけぼの学園高校については、存続の声が多いといいながら、適正規模に入っていないので、どうするかということも議論の必要がある。

会長 あけぼの学園は設立当初のコンセプトが2学級ということでスタートしており、変更するのは現時点の状況ではないと認識しているがどうか。

中谷委員 あけぼの学園高校に入れず奈良県の学校に行っているということや、バスが出ていても名張からは交通の便が悪いということは、考えなければならない。

山森委員 4学級だと高校は活性化しないのか。

事務局 学校規模に応じて教員の数が決まるので、地歴や理科の選択科目等は教員数に応じて置くことができるし、部活動の種類や専門的に指導できる教員の数にも関係する。

山森委員 高校卒業後の進路も考える中で、4学級の高校では、大学進学への教科面での対応ができにくいとなると子どもにとっては不利になる。

上島委員 地域の普通科志向が高い中で、伊賀北部の普通科1校、伊賀南部の普通科2校でかけひきする問題ではない。平成27年度は生徒数が減るが、また回復する傾向があるので、その学年だけ減ることはやむを得ない。あけぼの学園高校の必要性はわかるが、特別扱いではなく、基本的に3学級から8学級の中で押さえなければならない。

会長 3～8学級は全県の基準であって、この地域の考え方として、教育活動が効率的かつ効果的に行われる学級数は6学級くらいとイメージするのが適当ではないか。あけぼの学園高校の2学級は絶対ではなく、増やすという方向も考えられる。それを共有されている認識として、今後の議論をすすめたい。

中谷委員 3学級がこの地域にそぐわなければ、「4学級以上」で議論をすすめてほしい。

会長 高校の校長の意見はどうか。4学級や5学級では難しいと感じるか。

渡辺委員 各校の校長が4学級以下になった場合に活性化・魅力化をどうするかは大きな問題であり、いろいろデータがほしい。例えば、普通科の4学級と8学級の学校運営費、部活動の数や県総体の成績、教員数、入試の倍率がどう変わるか、また小規模校の魅力化の取組が資料としてあれば現実的な形で見えてくるのではないか。

山森委員 あけぼの学園高校を再編するというのであれば、名張からも3割が行っている、それに対する名張での受け皿が必要となる。

会長 あけぼの学園高校については2学級という固定的な考えではしていない。

事務局 あけぼの学園高校は2学級規模で、特色ある系列を置いて運営している。また、県内の小規模校で連携型中高一貫教育を実施したり、コミュニティ・スクールで地域と結びつくなど特色ある取組を行っている学校がある。

味岡委員 これまでの議論の中であけぼの学園をなくすことについては中学校の先生方から反対が多かった。この学校で受け入れられて自己実現をしていく子どもたちがいる。ここでは伊賀南部の高校の活性化をどうするのかという議論をするべきだと思う。

会長 伊賀は一つという考え方で協議している。

上島委員 伊賀地域全体として、普通科志向が強いことも踏まえて、子どもたちが地域の行きたい学校に行けるように、地域にあった形で考えていかなければならない。

会長 名張の分科会でも議論したが、各校の特徴は何なのか、未だに結論を得ていない。残すだけが問題ではなく、どのような高校にしたいのかが大切である。

山森委員 保護者としても、子どもが進学先を決めるのに、そういう方向性は必要である。

池原委員 普通科については、特色化は難しいが、本校では小規模化して教員数が減る中で、これからも単位制で幅広い選択が維持できるのかという心配がある。

会長 今ある特色をどう維持するかも重要な論点である。現実には6学級から5学級になることが、単位制の維持にたいへん大きな変化をもたらすということである。他の小規模化した高校でどんなことが起こっているかなどの事例があればわかりやすい。

中谷委員 平成27年度となると実際に関わるのは今の小学校6年生の子ども・保護者なので、小中学校のPTAのほうで、意見を吸い上げていただく必要があると考えている。

(2) 伊賀地域における高等学校の今後のあり方について
(資料説明と質疑のみ)